

茨木市立三島小学校 全国学力・学習状況調査分析結果

令和3年10月作成

【今年度の結果と取組みについて】

○●国語●○

(領域ごと)

- | | |
|------------------|---------------|
| ①言葉の特徴や使い方に関する事項 | 概ね良好な結果であった |
| ②A話すこと・聞くこと | 概ね良好な結果であった |
| ③B書くこと | やや課題が残る結果であった |
| ④C読むこと | 概ね良好な結果であった |

(問題形式)

- | | |
|-------|-------------|
| ① 選択式 | 概ね良好な結果であった |
| ② 短答式 | 概ね良好な結果であった |
| ③ 記述式 | 概ね良好な結果であった |

(無解答率)

概ね良好な結果であった

(その他)

最も正答率が高かったのは、設問②二の、文章の中の言葉と同じ使い方をしているものを選択する問題であった。

最も正答率が低かったのは、設問②四の、資料を読み、文章から中心となる語や文を見つけて要約し、決められた条件の中で書く問題であった。

無回答率は、今年度は全国平均を上回った。最も無回答率が高い設問は、③三の漢字を使って、書き直す問題であった。

分析

○領域別にみると、「書くこと」への課題が顕著にみられた。校内独自に全校児童対象に実施した教科アンケートにおいても、作文に苦手意識を持っている児童が多いという結果が出ている。とくに、正答率の低かった条件付き作文（書く）の問題では、文章から必要な情報を見つける「読解力」、見つけた情報を文章に表していく「書く力」が求められる。昨年度より校内で研究をすすめている国語科の言語活動の授業づくりにおいて、それらをつけたいかに位置づけ取組みをすすめていく。また、国語科の教科の枠に限らず、長期的に「書く力」の積み上げを意識した取組みを充実させていく必要がある。

○日常のさまざまな場面で、既習の漢字を使う機会を意識的に設け、六年間を通して漢字の定着を図っている。

○問題の形式を問わず、問題番号③からの後半の問題では無回答率が高いことから、長文を読み取ることに慣れていない児童が多いことが伺える。一定以上の量の文章を限られた時間で読むなどの経験の差の表れともとれる。読書習慣の定着に向けた取組みも引き続き力を入れていく。

○●算数●○

(領域ごと)

A数と計算	良好な結果であった
②B図形	概ね良好な結果であった
③C測定	概ね良好な結果であった
④C変化と関係	概ね良好な結果であった
⑤Dデータの活用	良好な結果であった

(問題形式)

① 選択式	良好な結果であった
②短答式	概ね良好な結果であった
③記述式	良好な結果であった

(無解答率) 概ね良好な結果であった

(その他)

最も正答率が高かったのは、設問③(1)の、棒グラフから数量を読み取る問題だった。
最も正答率が低かったのは、設問②(3)の、複数の図形を組み合わせた平行四辺形について、面積の求め方と答えを記述で答える問題だった。
無回答率は、全国平均をやや上回った。
最も無回答率が高い設問は、③(4)の帯グラフから、割合のちがいが一番大きい項目を選び、その項目と割合を答える問題だった。

分析

○正答率が全国を上回る結果となり、少人数指導や算数を研究教科としてきた本校の学力保障の取組みの成果が表れている。

○記述式問題に着目すると、全国平均の正答率を下回る問題もあるが、多くの記述式問題の正答率は、全国を大きく上回る結果となっている。これは、普段の授業で取り組んでいる問題解決型(児童が主体的に課題を見つけ、解決していく)の学習の成果の表れだと考えられる。

○無回答率は、全国平均と比べて概ね良好な結果が見られる。これは、単元ごとの課題の工夫や、単元末の演習問題(プリントゲッターリー)等も、児童の問題解決意欲を引き出すことに繋がっていると考えられる。しかし、複数のデータを比較し、必要なデータを使って自分の考えを記述していく問題の無回答率は、高くなる傾向が見られた。必要なデータを取捨選択し、自分の考えを整理、表現する力の育成は、今後も必要であると考えられる。

○領域ごとに着目してみると、全国と比べて正答率が高い傾向ではあるが、図形領域に依然として課題が見られた。図形の性質や構成要素に着目し、図形の構成の仕方を捉えて、面積を求めるなど、知識・技能の定着に終わるのではなく、応用問題にも対応できるような活用力を育む必要がある。

○●経年比較●○

全体的な傾向についての分析

平均正答率は依然として全国を上回っており、これまでの取組みが児童の力に繋がっているとされる。
平均無回答率は、算数、国語共に全国平均より高い傾向が見られる。問題文が長く複雑な問題、情報量の多い問題で無回答率が高い。
問題を読み解く力、情報を取捨選択し自分の考えを整理、表現する力を養うような取組みの充実を図る。

学力高位層と学力低位層、エンパワー層についての分析

全国平均と比べて、学力低位層が少なく、高位層が多い。
国語では、高位層が増加する一方で、低位層の増加も見られる。
算数では、高位層が若干減少もしたが、依然として全国平均を上回っている。また、低位層も減少している。

○●取組み●○

学力向上に関する取組み

三島小学校では、『わかるって楽しい 学んですばらしい [伝えあう 聴きあう 分かりあう授業づくり]』をテーマに、どの子にも確かな学力をつけるため、一人ひとりの子どもの立場に立って状況を把握し、適切な指導や支援を以下のような取組みを通して継続的に行っている。

- ぐんぐんタイム …毎週金曜日の朝の学習で、国語のプリントを行い、ことばについての学習を深めるとともに、生活の中から題材を決め、ミニ作文を書く活動を行う。
- 放課後算数教室 …学期に1回、全職員が関わり、放課後の補足的な個別支援学習を行うことにより、基礎基本の定着をはかる。
- 学びんぐ教室 …3, 4, 5, 6年生の学年で、学年ごとに曜日を決め、学習支援アドバイザーなども関わり、放課後に集まって宿題や算数のプリント学習を行う。年間を通して、自主学習や家庭学習の習慣化、日頃の学習の復習と定着をはかる。
- 家庭学習 …年間2回、家庭と学校が連携し、子どもたちの「家庭学習」と「基本的な生活習慣」の定着をめざして二週間行う。
- 校内算数診断テスト…年度末に校内独自で行っている。一年間まとめのテストの結果や児童の実態を元に、次年度の重点領域・単元を決め、T.T(チームティーチング)や少人数など、授業方法の形態や内容を検討し、授業改善につなげている。

子どもたちが安心して学べる学校環境づくりとして、すべての子どもが一人ひとりのよさや能力を最大限にのばし、安心して学習していくために、ふだんの授業において子どもたちの学習規律を確立していくことを大切にしている。また、ペア・グループ学習・全体交流などの学習形態を効果的に取り入れ、互いを認め、高め合いながら、共に学ぶ学習集団の育成をめざしている。また教室の掲示物やさまざまな学校生活上のルールを全校で統一し、どの学年・どの学級でも共通の学習環境を整備している。

今後の取組みとしては、話し合いの機会をより増やし、どの児童も意見の要旨をまとめる経験を積み重ねることで、考えの中心を捉える力、複数の立場や見解を分類・整理する力をつけたい。書くことについては、文や文章の様々な構成についての理解を深め、それを活用し、自分の主張が明確に伝わるように書き表し方を工夫する作文力をつけていく。そのため、日常生活で文を書く機会を増やし、また文章を読み合い聴き合う活動を通して、書くことへの興味関心を高めていく。読むことについては、教科書教材に関連した作品の並行読書に積極的に取り組み、読書月間などの取組みとあわせて、様々なジャンルの本に親しめるようにするとともに日常の読書習慣の定着につなげる。

算数については、日常の事象を数理的に捉える視点を持つために、特に低学年では具体物を扱った算数的活動を充実させる。また、情報を整理し、筋道を立てて考え説明するといった問題解決の力をつけるために、学年に応じた説明活動や記述活動に組み込み、算数科としての言語活動の充実も図る。そして、視覚的支援の活用や、実験などの活動を取り入れることで、問題に対し具体的なイメージを持ち、数直線や図などを使って分かりやすく表現する力をつける。これらの力を元に、既習事項を生かして問題解決に組み込み、自分の考えをノートにまとめる力につなげる。また、授業で学んだこと、参考になった意見、これから学んでみたいことなどの視点で授業をふり返り、確かな学力の定着、書く力の育成につなげる。